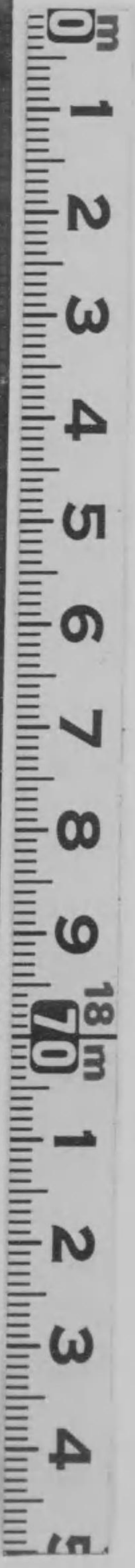


特261
814

新正曲
曲譜
筑前琵琶歌
水也田緑水
夏の下



始



特 261
814

序

近時家が筑前琵琶は旭日昇天の勢、赤い家庭
 音楽ごとく紳士淑女と歓迎せられたる一方は劇界
 にも琵琶を専らに利用する様子が成り、其教
 育百に急足の表展を認め、其の之を信じて琵琶の
 著書も山越り、其れを存する志が、小から曲書の
 正しく文章の間遠の甘く、定全なる著書の母、其のは

空々漢の... 年を... 河... 事

茲に... 海... 多... 年... 確... 定... 河... 調... 子... 曲... 譜... 之...
附... 春... 卷... 一... 二... 夏... 卷... 一... 二... 秋... 卷... 一... 二... 冬... 卷... 一... 二... 及... 新...
曲... 上... 卷... 一... 卷... 二... 流... 秋... 集... の... 十... 一... 卷... 一... 分... ち... 本... 書... 以... 考... 考... 行...
流... 一... 年... 一... 年... 以... 下... 河... 行... 考... 考... 行...

水也田録の流

曲譜及曲節

冬	秋	夏	春	∩	∩	一、二、三、四、五、六、七、甲、乙	音	調
...	合の手の譜	
...	流一の譜	
冬節	秋節	夏節	春節					

番、号、丁、鳥名
木、火、土、金、水、地、天

□

○

|

⊗

☆

∩

∩

琵琶の合の手

詩入は詩の類

歌入は歌の類

續 き

吟變(例は五六の中間の声)

五絃節及十二段秘曲の合手

崩勇社の譜

悲哀の譜

？ ㄐ^風

夕

月

ツ

ク

旭

山

憂愁譜

大落小落

夕日節

月節

露節

雲節

旭節

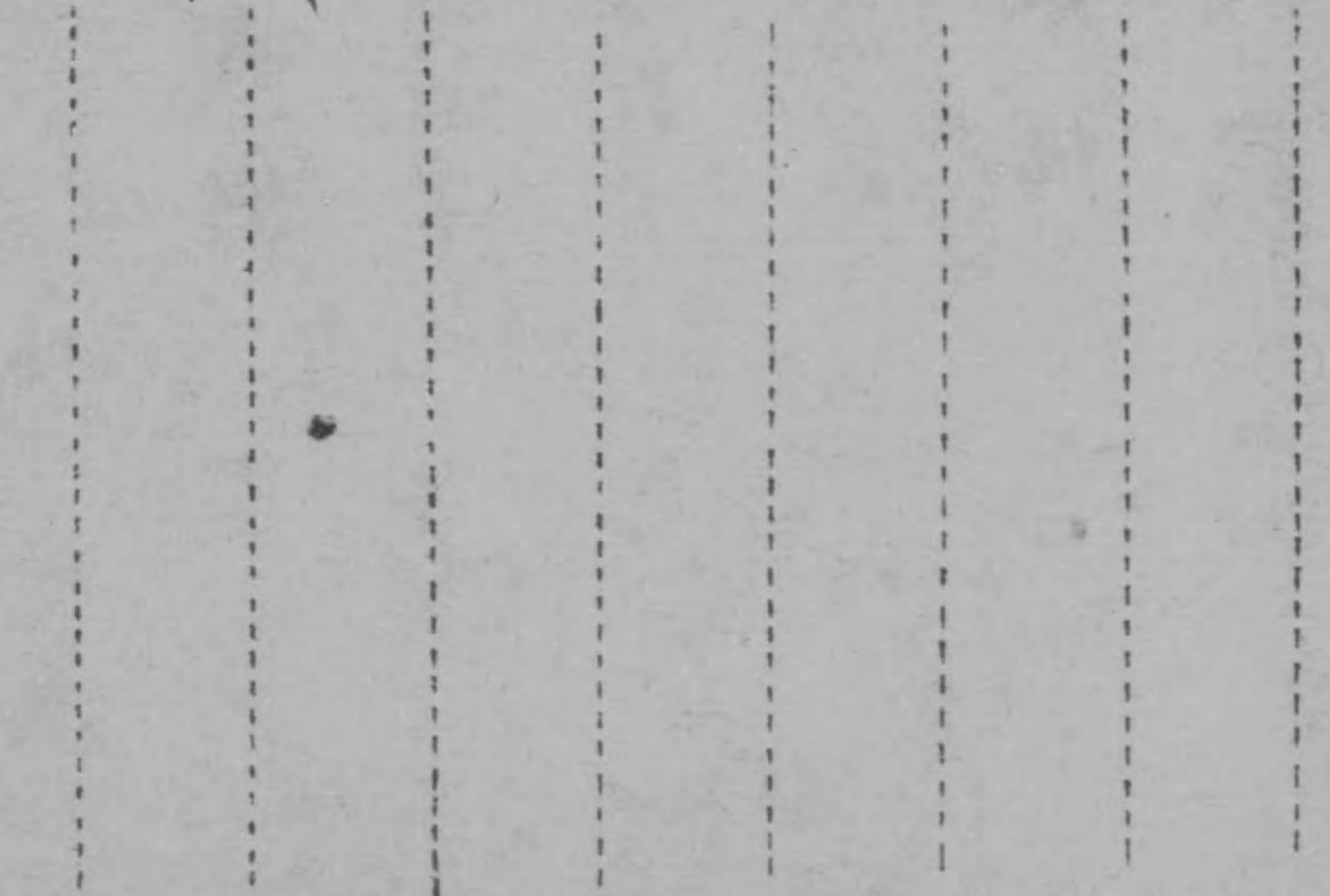
山越節

目次

盆栽樹 一
 装束前下 九
 静江前下 二四
 玉藻前 三一
 日本舞 三九
 名残の花 四九

蒙平 五六
 芳流閣 六四
 吉野山 七一
 栗津原 八五
 辨の内侍 九二

わんわんーんんんんん



淘かり伸のび上あげ
 伸のびべ上あげ
 淘かり伸のび下さげ
 伸のびべ下さげ
 抄すひ上あげ
 強つよめ
 大廻おほまわ淘かり伸のびべ
 淘かりり廻まわり

筑前琵琶歌

夏の下

(中傳の巻)

水也田録水編纂作曲

盆 裁 樹

駒^二成^一駐^二め^一敷^二砂^一の

佐^シ野^ノの^ワた^タりの^ユ雪^ノの^暮

雪^シ似^ト鶴^ノ毛^ノ飛^ビ散^リ乱

雪^シ似^ト鶴^ノ毛^ノ飛^ビ散^リ乱

袖^スの^ウち^ノ拂^フる^景も^ナり

佐^シ野^ノの^ワた^タりの^ユ雪^ノの^暮

人^ヒ着^キ鶴^ノ裳^ノ立^テ排^ハ廻

此^コ家^ノの^主人^ノ候^ハ守^リ也

盆裁樹

全

家は一處不住の
六の雲暮も道も
三はれ一夜の霧り
主人はいつと恥
三はれ一夜の霧り
主人はいつと恥
三はれ一夜の霧り
主人はいつと恥
三はれ一夜の霧り
主人はいつと恥

雲水の身を候が
三とい困ト候好に
三言み給へ言ひければ
七やぞ申さば善根の
四賤か伏家の危住ひ
四夜のとねも持ぬ身は
四さば言人思人下給はらば

見苦しけれど一夜
七旅僧は善い肉入り
五夕餉も淡き粟の飯
六夫婦の心厚とて
三今は信し此の
三降りに夜半はもすから

五新河

明日給へと申
六草鞋解りて座に直り
夏河はよ浮き暮せとも
五饗應様の殊勝なる
五若生が夢つゞは
三松吹く風や野辺の霜
三寝られねば夢も見ず

何思出のゆきくさく
小笈か上も積む雪の
夜もよみぐり更夜り
薪もつとて消えぬの
譬へんものもなから者り
庭の方へ立出—水地
梅松櫻の云程よ

話もはなりの長けれぬ
落ち来る声も涙を
焚くも寒く致防ふへ
此家の内の哀れさ
何思いけむ主人は
携り来る鉢の木は
梅は銀苔に耐るなる

今の有様凌ぎなば
松は老盤の深みどり
誓ふ心のたぬ—我ば
心の減切りを焚く
いかり主人よ苗字成
主人は形容改め
源左侍門者毒が

花咲く春のゆらな
零落はれが愛の
花は櫻に人は武士
旅僧は深く感も
谷来り終へる者れ
某はうは修野の
なれの果を候主

益我樹

五

三 一族共欽地終押欽せられ
四 とは云ふもの、今爰に
五 拗断なれども具是一領
六 先一番も馳せ奉命
七 討死なむ人身の覺者
八 大久能も死ぬる
九 阿加もついで曉の鐘

二 茲に浮世の假住
三 瘦せたるも馬一疋
四 スワ謙倉と関ふらば
五 思ふ敵と引組んで
六 先づ又まは我命
七 心も誓ひ侍るが
八 共は名残も残るゆゑ

一 濁みて別れ旅の僧
二 銀花繚乱朔風寒
三 斯は月日も経つ内
四 澄境も身成かため
五 中は為世は只一人
六 象も変りて柱いさ
七 爰は時の執権時頼入道

一 何処に於て歸る
二 遠近模糊看不着
三 謙倉よりの命なり
四 集りつゞふ大
五 瘦せたる馬繩手綱
六 謙倉さへ馳せて行
七 若由は前名

五藏村

我は遠く雪の暮
末めし旅の僧なるが
言葉遠はぬ武士の道
おればお世か本領なる
梅松櫻もらなみある
庄おら合を三十餘郷
お世はらぬ書押頂さ

汝が家も暮り成は
其時汝が誓ひたる
いを報はを叶ふへ
修野の庄の屋外
梅田松ヶ枝櫻井の
子と孫を賜ふまが
再い花咲く後雲集や

縄の半綱も引かて
胸の向かひ成早めつ
武士の様も自出及れ

古郷も飾る綾の
木領もそが歸りける

装束以前上

鹿皮近ふ稱丈山成見ず
はゆる猛丈已成知す

装束以前上

一 智者も千慮の一失あり
 一 愚者も頓悟の果報あり
 二 色即是空 慈悲母也
 三 賢者凡事も煩惱の
 四 時雨も深きぬ松林も
 五 手折見しは
 六 遠藤武者甚遠
 七 此及橋の造り
 八 寧に身も
 九 紅葉の色
 十 備もた近将監持遠の遠見
 十一 津の國渡辺の橋奉行
 十二 重く恩賞下賜
 十三 紅葉の色
 十四 備もた近将監持遠の遠見
 十五 津の國渡辺の橋奉行
 十六 重く恩賞下賜

一 錦
 二 祝の遠
 三 相は婦
 四 宴會の樂
 五 めぐり
 六 かねり
 七 綾
 八 花の都
 九 春から
 十 いか
 十一 くら
 十二 からの
 十三 なが
 十四 天の
 十五 花の都
 十六 春から
 十七 いか
 十八 くら
 十九 からの
 二十 なが
 二十一 天の

紫衣上

秋 換つてもつさぬ嚴なり

舞いあそぶめたる綺羅姿

紅葉照らす夕ばへの

かりけるをを生遠は

忽ち叔母の衣川打向ひ

何となく見知りたる人

真顔まかりと伺ひければ

調へも振もど砂小

縁ももつる一ともこの

母のかに匂ふ風香なり

るらるまがと見とれか

是喃言の舞の上蔭は

るも准夜の息女なり

叔母はるかさ竹音

三 忘れぬは娘装束の前

四 るるる興に遊ばし我

三 いはれと生遠大懐

四 逢ひも身も茶すさの間に

大人風といふ美麗

四 ますのたけの魂魄も

四 斯く盛遠叔母君に雲の道

おまの山

五 五ツ六ツの頃までには

四 より〜げなる言葉や

四 しては十餘年ぶのかに

四 変れば変る面影の

春 身も深む恋の初風

四 次々といふは許りな

四 我幼少の時装束の前

一三

一一

四 末々又婦を為さへり
 三 小耳鳥とて海人翻下
 五 首尾克くして給へり
 四 叔母君微笑たよて
 四 幼き時の根なり草
 三 妻よ又よと呼ぶ事は
 三 まるを袈裟の前より

四 父将監ののたまひて
 六 さいはし今夜又婦の盃
 四 思ひ入りしが申ければ
 三 ちよとられは誰人も
 四 雛らうびのたけむれお
 三 減ららぬ言葉なり
 四 源の渡ふ足取

二 二つ成りし子もなる
 四 世の機嫌よ一いふ一水地
 四 波風立てず取らざせど
 四 何先ぞうて聲取
 四 袈裟の前もよと関が
 四 断りもなき他人と添い
 六 今やよを妹脊の契

四 由なき事残はけより
 四 袈裟もよらほる衣川
 四 國遠きも入ればあり
 四 子もよまけて候とや
 四 といまづけらる某
 四 女の道まかぬはち
 五 取りかへ給はれ

袈裟の前上

命あけまじり草

眞意のけむりたるかろ

袈裟前は母君に寄る

それ様も侍はども

かすも叶ふぞ

根より思い切り給はれ

竊家路を帰らしる

山も志らばなほ火の

引くすべし色もな

足は妻は思ひ給は

すがまのち少夜衣

道もたかしく恋草の

理りせぬ室いつ

是程まはたねふも乃

振りすて帰給は

うら心も黒髪も

はめもわかぬ鳥羽玉の

悪の周路はたどりけり

こそもかきも又婦か

私をけさの跡慕ひ

悪の周路はたどりけり

悪の周路はたどりけり

袈裟の前

袈裟前

三 一市し 備も爰よかゞいざの
二 白キ紙見れば更る夜
三 帰れむと紙待らわじ
六 すすみゆくかゝい盛遠の
四 音も驚ろく装束の前
四 盛遠馳寄られ装束の前
何運りかす帰られが

三 わたせる橋もたゞ霜の
三 源の波は装束の前
三 假寝なからに臥し終ふ
五 坪の内まがりのび入る
四 紙燭差出見たり人ば
三 ささいられ程とい物
六 許詮波は殺し秋も又

五 共相果てぬ身のみ
四 何まはもなると其時
五 かけ入らんとする袖成
三 志ろくも暮れよせ給ひが
四 斯くも厚き思名
五 されど涙るの何さうへは
七 しろかに亡い給へか

四 沖も破も寄つぬ
四 覺り給へといすて水
四 替り新との装束の前
三 やらりそ是れ盛遠坂
三 今は何とぞかゞ海
三 共志も安のる
中 中 霧をける言の葉に

装束前ト

減つてむろはりの
まほしき若ゆば打らぬ
時分は計りおやの火成
乱れ髪を卧したるが
本望遂げさせ給ひ候へ
全園の時成まんの声
消えぬ命が果敢かた
下木

色も見せず賺しく
暫ら忍び待ち給は
吹き消し全園中ま介
涙をぐおけしす
約束かた言いかげ
風の音なるはもいびの
心悼しや装束は前

素より又の身かほり
座敷より何げなき
くろ知らぬ袖の上へ
抱き上げつ目守詰め
浅き縁し知らぬらば
消えぬ物成換子の
ながき真路の心わりも

死な心成知らせど
風情よるは沖の名
ねら花なる為若成
さても悲しや新はかり
いかなる霜もみぬ田
別れ心多かたは
ながき事な恨みは

第幾番

二〇

せめを名残の母の歎
別れをわもい定ぬんと
為若たび人眼覚
いのはるか漸くに
室もや世の何人々の
我身空なるなれば
さてあう歎を繪
二

見も見はられ今生の
歎をを愛し終へば
つと泣き出し終ふは
賺ねむらせ終いける
子持てもう情けを
跡もなき母上の
ゆるむせ終不幸の罪
三

前由りなる因縁か
おもいの淵に沈められ
湘よかつげんつげの橋
泣れぬ助か示さん
雲の深き浅茅の原に
いかに周回し入るが
涙も下む水並乃

いかに浪よするは人の
世も代りつれなき
洗らじ上げぬ黒髪の
もさかり短かた切りす
いかに周回し入るが
いかに周回し入るが
いかに周回し入るが

忍しのびね音ねはなくほ不ほ如く婦に
 折おもりもろ三さん更まいのの
 哀あ別べつ離り苦くののわやのの火ひ成せい
 死し期きもも何なにがが切きななれれ
 魚い成せい吐はくく程ほどのの風ふう情じやう
 遠と寺ていのの鐘かねはは無む常じやうのの音ね
 心ことと共ともにに吹ふくく消しょうすす
 二四一

静 御 前 下

三 かくかくてて頼たの朝あ公こうはは鐘かね倉くらのの
 二 鼓こ打うちのの音ねはは舞まのの音ねとと同どうじじ
 四 早はやのの樂がく堂どう送そうりり作しやうせせけけのの
 五 松まつのの一いつへへはは何なにもものの線せん
 四 鼓このの音ねはは舞まのの音ねとと同どうじじ
 三 三さんのの愛あいはは即すなはちちににぬぬべべきき
 六 鼓こはは工く藤ふじ左さ門もん祐ゆう経けい
 四 静しやう御ご前ぜん舞まのの音ねはは舞まのの音ねとと同どうじじ
 二 閑かん之の事ことはは恥かたじけなないい
 三 山やま風かぜはは深ふか山やまのの音ね
 四 若わ浪なみはは何なにもものの音ね
 三 若わ浪なみはは何なにもものの音ね
 七 三さんのの舞まのの役やく人にんはは誰たれか
 六 鐘かねはは平へい景けい時とき
 二五

静 御 前 下

四 時の調子の笛の彼も
 七 程なく祐修舞台上より
 三 天井高くひらめく
 四 梶原祐修の右の座に降り
 三 次の樂堂で待らかけた力
 四 祐修左の方へ直せば
 三 今も不定もなかる
 三

四 白山の節書意と注せられたる
 上のまら山廻廊乃
 四 手色打鳴り待所
 三 鼓の経より久成合せ
 四 白山は漢竹のよき成も
 三 静は前此有様見給
 七 今も不定もなかる
 七

四 姿もあつむ鶴の姿
 三 露も降りて羽衣乃
 三 いろかへぬは心なり
 三 深きもあつむの色がみせ
 四 白の袴はあつむに
 四 結い上げ流ふもなげは
 三 天は少女の舞乃袖
 三 静は前下

三 雲井意も喜ぶなり
 三 袖のみかろくはむけも
 三 皆とれなるの扇もは
 三 刺菱縫いなす水平に
 三 たけの黒髪はからかに
 三 夢ももろれと三保乃浦
 三 霞のよもまたなす
 三 二七

七 さらにもあらず美しの
喜つげ波るおくなら
かからばかかか入り
おこそせめ残が打ちられど
並ある人をあれ残思
せめだま打はずば一折
なほさずだま天は風

五 初音ゆかき鳥の
今や神母上の二曲は
祐経心なりや思ひえ
静は君代を法上げ
いら情なる祐経かな
舞ひあふもの残如何せん
雲の通い路吹きさら

祈らぬ者さながらあれ
敵前の舞なれど
思ふ幸は法ほや
以前は憚る気色
賤やうが賤のさ下環うかへ

此時静は前思ふ様
到官坂の山為りも
飛鳥落す鎌倉坂の
いしは夢は張上げ

縹々つる言の葉の
むかひ今もなすもがな

露の玉の緒いのちまを

ト
一 かけそが願ふ夕げすも
二 心にもに極き鎌倉武士も
三 骨節近も碎あれて
四 げもや静の前の様は
五 大和心の人の花
舞ににかけの思ほれて

三〇
一 雄きも舞細めり
二 か弱き女の一節は
三 かに静より七居たりけり
四 朝日は向ふあは島
五 哉 万代の末近も
様 の 鏝 映 ち り じ

玉藻の前

三
一 翠柳塵けば櫻花ちる
二 素性法師か深トケン
三 茲も坂部の竹綱
四 清水流下の踊るに
五 一人の子だも何らぬ身の
いと 怨も育る一番が

三一
一 彌生央の頃なれど
二 都も春の錦なる
三 北面の武士何りけるが
四 奇りも松子松いけり
五 名はば藻と名づけつ金
天興の麗質たがいで

玉藻前

三一

三 讐へば春火待ち得る
 三 月子村雲花の風
 杖柱も頼みつる
 今は便りも何ら表の
 下 雨はもと鳴きそ母も時鳥
 四 縹返せと冷もなれ
 雨は合める海棠か

三 匂い床し梅の花
 二 父母活共母去れば
 五 雨にさるや筆虫の
 嘆の八千夜百千夜
 七 哀れ藻や十七歳
 四 風は亂る青柳か

又孤児となり果てぬ
 四 詩歌管絃の才進も
 六 時の帝に石一出され
 三 才色念を掃り
 六 頃ば鳥羽天皇の元永三年
 三 高陽夜の雨一聞
 五 月卿雲客いかめし

玉葉の年

四 さはれ容顔美麗は
 四 人よ優れをとりかば
 五 大宮仕へてなけり
 四 君の寵遇限りか
 五 紅葉散り行く秋の末
 三 いろ幾敷く銀燭は
 四 絡羅星の如く列宿は
 三 三

四 これが皇子の御降誕
 七 月未達さよよい空に
 五 ろち時雨を吹く風は
 三 ハタと一時に消えなれば
 五 雲の上人立ち賭ぎ
 四 河の流しや不思議な
 四 赫耀なる光を放ち

四 祝の巨宴を知れける
 六 雲のけしきもなまらさず
 四 一夜の灯はためき
 六 黒白に分ぬ真のみみ
 四 松明疾をさすむれど
 四 秋なる藻の五体
 四 偏る月の如くなり

三 王上 敵愾斜ならず
 五 玉藻前とが申しける
 六 王上の御慍暮らせられ
 四 近侍の人を打撃き
 四 安倍春親を計りけり
 四 玉藻の前より奇怪なれ
 六 墓目の修法は怖れけり

玉藻の前

四 玉の一字は賜り
 六 かる異変のありあり
 五 いと重らせ給ふ
 五 時の陰陽博士なる
 六 春親とを思ふ様
 四 肝膽碎く祈りおと
 六 美しかりし安

忽ち変じけぬ狐となり
烈風豪雨呼び起せば
霹靂一夢百千雷
雨鬼倦めば風神叱す
天柱為す摧かぬ
修羅の巻も今あり
右往左往に逃げまじふ

憤怒の形相もの凄く
一天忽ち捲き曇り
とよめり涙も凍り
物凄ト云ふ有様
地軸も割れ許りなり
人々生ける心地なく
獅子奮進の彼の狐

當る者共蹴散り
いらいと許り雲も来り
驚破りけぬ変化
妖狐目かけと擲くば
つねへ云ふ
金毛九尾の彼の妖狐
安部素親も看破れ

縦横無盡に荒れ狂ひ
遥彼方に遁れ行けり
素親矢庭を帯りて
大空遠く進む行けり
那須野の原に逃げ去り
四傾けん巧らみも
三浦上總の両女に

王権の系

河に石を借りて
玄翁和尙の河法得て
天高くそと地ひろく
草莽荆棘地を委く
後楚の馬をたしむる

怨霊つぎせす仇せし
執心清き解
那須野の原は冬も雪
芳傳ふる幾千代

日本 日本 日本

叔父尾州清洲の城主
智勇兼備の大將
殊の外なる寵愛
引出物多給いける
深き恵が身に餘る
世も稀なる寶

日本

福島左門尉正則は
時の関白秀吉の
恩賜の鎧軍功の
心は左門尉正則も
大岡殿の賜物
朝な夕な起るも

④ けしきに樹をめぐり給ふ

④ 日の本三途の一ツツケる

⑦ 世は慶長の時津風

④ 板も鳴らぬ太平に

④ 聚樂の館は年月日

④ 正則殿は陣中に

④ 祝のよからし酌せ帯れ

④ 是が各高き日本旗

④ 明けば七年寅の春

④ 民の喜に限りなく

④ 弥栄へ是れめしむ

④ 家臣の面も打集い

④ 吉村又三門義勝や

④ 大橋長右衛門貞知等

④ 緋羅星銭敷のばかり

④ 身の丈六人のりり

④ 黒田甲斐守長政の家臣

④ 至の山麓城かきみ

④ 早や帰らんをけり

④ さても天晴の夜振り

日本旗

④ 禮かぶとの紛装

④ 中々混れる武士一人

④ けり成拂を見せける

④ 名も高き母軍但馬

④ 使者の役目も果てれば

④ 正則殿は声掛け

④ 黒田八家の生肉

四一

剛者一と呼ばれたる
 日頃のなま喚や喚
 言はれし但馬は平伏
 酒は性来不調法
 正則不興の面色を
 ぞ矢取る身のやぶるも
 云し甲斐がし
三番

但馬程の者ならば
 一献酌み下見せよか
 平は免と退く
 敵より見するは
 但馬は漸く座を進み
三番

おは情なき御遺
 敵我進ふに何らねども
 以無理なきし
 然らば酒は酌ます
 首を上げて降参
 但馬程の剛武者哉
 祝着あれは様も
日本舞

戦場の習わ武士の
 日頃なまぬ酒れば
 正則益々声何らく
 其かわれに今此處で
 一言流びを志か
 居伏させなば正則が
 秋
 河か
三番

但馬はやをら身成下
子我場の掛引
禮めがすくひさき
是非の心は黒田武士
若し酌みすもなる時は
きんそ正則は笑み
望みの物成取らす

さくも夜は難題
七一萬一の事
腹搔割を相見
いかに申すべし
殿の心所存
されば其時
其美は場勝負は持出

七合入の大さ
いふれんば酌み
百川及び如く
三杯は乾しければ
主の氣色は氣遣
コハ流石な黒田武士
約束なれば其方が

日本押

但馬は西に押し次
只一息は長鯨乃
河を打ち重ね
一座の面を興さめ
正則は父と勝負打ち
見事な貴族
望みの品成取ら

武士の實加し候^四
 心別毛ばし^四押し止め^金
 何とそ二言の候^四へき
 但馬は夢の心地^夏の
 陰の柏子の節面白く^四
 問の本一の此鎗^四戎
 花^金を滅の黒田武士

伊ガらんとな^四けり
 短氣なせり^四すらすの
 早や持^四り行^花けり
 伴の鎗^四引^花りあ^花り
 酒は吞^{秋(又不確)}め^花のむなら^花ば
 吞^四み取^花る^花程^花のむなら^花ば
 君の陣^四屋^花へ^花歸^花り^花け^花り

其功績は^四今も^花有^花
 武迎の花と^四たへ^花候^花
 油^三残^花る^花が^花目^花を^花夜^花れ^花

吞^四み取^花る^花鎗^花の^花名^花共^花よ
 語^四り傳^花へ^花そ^花四^花つ^花の^花緒^花の^花

名残の花

風^一流^花ふ^花花^花も^花も^花稀^花儂^花は^花は^花一^花
 春^四を^花名^花残^花の^花人^花の^花身^花が^花

名残の花

千年の林成契るるふ一
三 杉の廊下の長さにも
定も涙の種なりけれ
備も淺野内匠頭長継殿は
四 田村右京太夫へお預けなり
其朝まは赤徳の城を
行列美身へ登城せ身

五 吾の滄もあはなれど
似り難き一期なり
坂中又傷の里場より
前に粗忽の預ればそ
勅使接待の奉行なり
りの夕まは藝園さん

殊に殿を因人駕籠
七代の怒みの重洲の地
國りみどかき櫻田成
節も直なる竹芝の
七 徳て休息の間もな
五 多門大久保の副使と共に
切腹仰せ付らる音

右様の元

大下馬先より右折し
香付万代は流れても
跡も見る目の霞の關
田村の邸に着き終ふ
三 莊田下總守は忠使に
成儀印も入來り
四 内匠頭も申渡せ

是を三世の別れか
 見下す襟も露られは
 今死す身はかからぬ
 生と死との憾なり
 世念我語も目よれば
 つらぬ名残の時迄
 流行母老の鐘の音に

言はず語らず主従が
 見上る袖の時雨の内
 吉良我討る得ざりし
 又今更し流りて
 心も睡も亦目
 早らも初夜必告てゆく
 流れて散る花の名残

烟光の関も尊く如
 不帰の旅路と出る身に
 是我形見をせもて加
 取り落し給うと
 挿みながらの匠周が
 ほろろかゆらの雲帰る
 やかすや雲と降りかほる

弘誓の海も法り山
 可らばとだも言い散す
 懐紙必出々危前
 送る給ふ皆後教
 見送る甲斐も涙を
 袂ぬりせし春雨は
 定期を豫をね坂下

名残の花

五五

三 怨敵吉良氏討取
 四 至君の遺言は果し
 五 忠臣義士の墓とあり
 六 絶えぬ香華となりけり
 譽は幾世高輪の
 少地

義 平

三 備も平治の合戦は
 源氏は平家に打ち敗れ
 金工

一 右馬と楯義経は
 二 野間の内海を落ける
 三 無惨の最後は遂に
 四 終に長田に討ち死す
 五 剛勇無双の若武者は
 六 七父の敵と清盛は
 七 此事は平家と関
 八 五百騎の卒を遣取
 九 出た
 十 都をいさみつ
 十一 家もわらわ居りけり
 十二 難波三郎経房が
 十三 道すまふ牛料
 十四 付

義平

五七

七 義平驚く氣色なほ
 勇戦奮闘當るに任せ
 一息ホトつとく 知都
 血路及周は江州の
 取圍はれし痛もや
 乱箭痛手はあはれ

近寄る軍共斬りて難
 群がる敵は突し入り
 斬り棄つ、難なれば
 又もや経房の五十騎も
 身は石も何れぞ
 遂に虜となりし都府

されば清盛義平は見え
 義平は密に上り上り
 清盛義平より打向ひ
 比辺かた馬坂の嫡子
 突天晴の巻量かな
 五百騎は以て圍み
 のかれを給いなかの

引出ださぬありるに
 清盛と対坐を敷下す
 夢成松うげ問いけるは
 悪義平と申さるや
 されど前の経房が
 車もなげも切り拂い
 今もた僅か五十騎も

生捕られ給ふは如何に

答ふにまじまじとけり

情負は時の運に

我五十騎を捕はれり

以邊又運つて

義平が今日尋ねるべし

言語同断の言葉かな

流石の入道系がみ

義平もを冷笑ひ

窮達は剛腹もらず

倫意命の窮る処なり

執窮らば

かくて流盛の身震る

以辺父子は流歎に興み

軍下必勝かせたる罪なる也

忠義正直の此入道

天神地祇の守護あり

實に何を我か運命

研の中終の扇も

義平大に打ち笑ひ

志はすくもるの鏡

義平

我は勅命も運徒に流す

何運命の窮も在るや

福壽圓滿徳次母量

宝賢と稱へ

身体は拂い祝けり

勇吉は元以哀ふ事成

弓矢取る身の物忌い

四 止千萬さりなかり

四 我子及子及逐徒

三 是れ何等の証言

三 此邊は少納言信西と共に

三 君我惑は是奉るに

一 信西と深り所邊

三 了何朝家と興

三 今の言葉より時

三 此邊自ら忠臣

四 抑も今回の事の因

三 朝政我擅り

三 家か父され我憤

四 除之と一はらに

四 心事減り眼

四 此邊は表面は忠義

四 されば我等は虎

三 我我限りし罵り

三 此處我蹴立て入り

四 嗚呼義平我勇なるも

三 其靈雷の神となり

四 時の平氏我懼れ

義平

四 裏面は私曲の心

三 此邊は即ち狐狸

三 清盛孫と怒我

三 心地より一次第

三 終り経房を斬られ

三 やがて経房を打ち殺

三 例はも猶且正

六三

六二

武勇の鎧義平の
心儀し義平の
心様より雄々しけれ

名は悪源太と呼れも
心様より雄々しけれ

芳流岡

鳴呼憐むべ大塚信乃は
親の遺言紀念り名刀

心よ占める身も傳ふる
得かたり時成得てかば
谷成揚が家成興美
振かたりなる村雨り
今や我身成傳力かむ
左れば當座の辱成
野多の困成切り糸

艱苦の中に年成終る
遠く所我へ齋し
りの福はわがはた
刀は舊の物なり
誓となりか憾みなる
さけなむもの大塚信乃
芳流岡の頂上

芳流岡

輒く譽り登れども
 一かどは世を躊躇ひつ
 時も頃は六月二十日
 一箇熱死わする志は死
 下は大河滔々
 流は名角坂東太郎
 進退を以て谷をれり

脱れ去るべき道もなぐ
 去ば息を休めたり
 六のふも倉も乾葉り
 凸凹隙なく波も似て
 生死の海も入る
 氷際のみ舟楫絶えり
 折しも威の捕をうけたる

大銅現ハ唯一人
 一層二層三層と
 往多か如く譽り來り
 會する十年間か
 總てを手にて害の世討平
 疾視のあて立形勢
 天枕のねりたるも似たり

身は霞を登り新
 指は傳ふ絶氣の
 以てはかると呼掛り
 急遽に信乃の害の近
 互に隙を窺いつ
 浮園の上を鶴の巣
 廣庭に控ふる威氏公の始めに

四 警固武士が堅壁を呑み
 如何なる隙や有らん
 三 数回と変るむ子の轆
 四 一上一下虚を實く
 七 雨虎深山と挑む時
 二 龍巻潭に我を時
 四 斯如くばか

四 手は汗握り見送りの
 四 信乃が切込む太刀風
 三 入る虎踏み馳
 五 室の若は返す太刀音被妙
 九 冷然と云起るも
 天は律ゆる高閣乃

一 棟多事未嘗有の暗業
 五 坊みかけを打つる太刀成
 三 返す巻は付け入りつ
 五 肩間を望み下を打つ
 四 信乃が及ばは誤際より
 現ハ後退と無手と
 檢が倒えんと勢合せ

五 是場は揃り梳き去ら
 現ハ右手に受け流
 四 下下被りける勢流
 河はれおきと折れ流
 互に利腕かを取り
 探みつもまはら
 十 是

芳清明

三 此彼齊く踏み之り

一 坂より落ち好異ならず

六 止るべしも阿らふれど

五 末途なる河水の

四 水際響け舟の岸へ

二 傾く舷と立つ浪よ

一 欄下と張り断れり

七 河辺の方へ覆奪の依

七 高低険と堯り勢

五 數十尋なる崖の上り

一 底まは入る程もト

一 果り合しる落たりする

六 ガレブと音す水

一 射る矢の如き早川の

ト 莫車舟へ押出はれ

二 誘ふ水や廻り舟

三 行方も知らずなりけり

三 志かも追風塵潮よ

一 行方も志なきなりけり

吉野山上

乙 一 元弘三年四月の末方の次なりが

吉野山上

七一

七〇

賊軍十方有餘騎
松丸もくも大塔の
峰高りと道細く
おとに村上父子は
頼も落ても見え
城の背面も思ひ
左右の人を奮
戦し

吉野の孤城を
赤松討つと謀り
山陰へ苦海
勤王の宮を籠り
志かろに賊の
軍の座を襲
漸く敵を打ち
散らす

やがて前軍の
此方及び折り
禮も矢は折り
招く尾花の
いと勇ましく見
忽ち前軍は
最前軍の

軍議決し折
大なる提
高し馳せ来る
征矢の群立つ
是を村上彦四郎
部も志めり
味方は息を
絶した

六 敵は新子成入れか入つ
 今は敵は覺へ候故
 三 されば畏る事なれど
 四 以物の具成下賜り
 義光敵歎^申下
 五 容れを終へ乞^共

五 直筆の事せ帯れ給
 一とづ^聞給へが
 敵はさして^追継ら^金
 三 錦の由^直筆と
 四 以津^成も^冒存を
 六 何卒^臣か^微忠^成は
 三 家は^以津^成は^終ら^給

七 だんぢかめ忠^成
 五 我も^共を^成に
 三 吾^成人^之成
 七 義光^成派^成
 三 勝敗^成は^成
 三 今^成を^成
 四 只^成願^成い^成上^成げ^成れ^成

吉の山上

六 下^成の^成
 三 室^成は^成
 三 禮^成の^成
 五 今^成昔^成
 三 後^成の^成
 三 今^成を^成
 三 家は^成

禮^レ真^レ聖^レ物^ノの^ト具^ヲを
我^レ幸^レの^トか^レれ^バば
若^シ我^レ運^レの^ト飲^ミな^バば
三^カれ^トけ^テな^クも^モ義^光
三^以て^テ明^神の^ト前^ニは
四^されば^義光^ニ木^ノ櫓^臺
四^見送り^まり^今日^とそ
土

是^レ花^もなり^下に^花
五^汝が^眞福^は祈^るべ^し
六^泉下^に汝^が体^丈り
六^厚く^言葉^は賜^ひつ
下^南向^い開^かせ^けり
四^ほろ^かり^室の^ト後^影
櫓^ノ小^間火^切り^落し

四^身身^の何^らは^大音^沙
五^今上^第三^の皇^子
五^今天^下の^ト為^り怨^み各^々
四^杯み^後に^汝等^の
四^腹切^り時^の飛^せを^せ
四^禮我^脱や^ぶら^すり
四^二重^少袖^は押^し布^毒

六^我ら^は人^皇九^十五^代
六^一品^親王^獲良^{なる}が
自^害な^る人^は有^様殊
四^武運^忽ち^つは^ほそ
五^賊火^ハと^打ち^睨み
四^靴落^しな^ら練^絹の
四^太刀^は逆^をに^握り^流め

吉の山上

四 莫一文字以印腹哉
 咽喉以ケサ突通一
 七 室の子の大軍之次見
 五 首以給は給
 下 人なりぬ
 三 悪くもいふもなから
 三 女は久方の
 五 天の川へ向はせける

七 橋切り給はる太刀を
 五 うつ伏せは伏し
 六 女は自害あり
 四 我れと走
 三 敵の比類
 三 義光の忠死の
 五 天の川へ向はせける

天の川へ向はせける

吉野山ト

三 去程も大塔の室は
 二 山の峽よりおの
 三 心にかはるは
 三 三 龍
 三 わづか十三人の
 四 室は山路
 三 従ふ人と親見合せ

吉野山ト

五 落るなみは時ならぬ
七 茲村に家光の嫡子家隆
折しも吉野の親り
四 賊攻のほらい五百金騎
進退のまもるわらう
三 義隆キツたおもふ様
一 死すは時は此時なり

三 袖の時雨と見えたり
六 高き後い居り
四 利慾も途じり物共
前跡は遠り来り
逃れ途もなかり
父のかねて宣い
三 高の山前平伏
八〇

三 此計は義隆の計なり
五 ぶれへなりと速か
四 とも終る義隆は
六 つらなりなる細道
六 敵地相手に待たけり
一 嵐の前は咲く櫻
四 此時賊軍ぞよめり

三 志ばけり共攻め
三 落ちては終る人
五 敵もむかして唯一騎
五 立ちあふかりと眼
三 心の程の石
一 散るを自出夜花
四 高は彼方見えたるや

吉の山ト

八一

四 川取の功名是れ
道幅狭く谷深く
五 玉い進は様もな
四 園トはな状なれど
六 若成少猶牙の取
七 少りくと難や
八 敵成谷へ蹴落し
水

五 秋のせりて実のせ来れど
六 苦むす叢うばはち
七 廻を出入す人もな
八 義隆さうとつ笑
九 是実の馬の志勝成
十 平頭切りを驚か
十一 半時ばかりも支へ
十二 九下五下

七 心矢井ははれども
八 浪も血汐は谷川
九 次葉く日義隆は
十 敵も徳そ近定
十一 義隆叢うばはち
十二 小のこか
十三 眺むれは

六 身は金珠ははれど
七 頁り教の端
八 水も漆も
九 痛手は疲れはけ
十 僅の隙は得たり
十一 支はつ
十二 小のこか
十三 眺むれは

吉の山ト

四 心安しとよりみむつ
 五 志たけげも休し
 六 十文字は一期
 四 又此衛み岩上
 五 飛入るる死なれ
 三 名は竹帛の揮
 三 かも忠義の父子
 四 支の落ちるに
 七 家子是を終れり
 五 腹十文字は捨切り
 二 千仞の谷より
 三 拵はもろい親子
 一 何れは千載
 三 支は再び虎口

高野の方人落ち給へ

高野の方人落ち給へ

粟津ヶ原

三 楚の項王が侯成
 二 猛者と少へ勇將
 三 いと哀れなる事か

三 りつとあは日の本
 三 最後の様成語
 三 清和流の支流

粟津原

木曾の冠者兼仲^三
 栗殿谷^三進^三い^三落^三
 在^四多^四都^四引^四攻^四め^四の^四情^四利^四
 毒^七け^七我^七毒^七と^七汚^七り^七た^七る^七
 秋^六の^六木^六の^六葉^六と^六散^六り^六を^六し^六
 あり^七傳^七へ^七たる^七子^七刑^七多^七
 日^七頃^七の^七み^七一^七回^七天^七主^七

平家十^四萬^四の^四兵^四戎^四
 席^四の^四羊^四皮^四驅^四る^四如^四く^四
 二十^三余^三年^三の^三淺^三業^三華^三
 平^五家^五の^五飯^五系^五一^五息^五
 津^五母^五は^五廻^五る^五小^五車^五や^五
 引^六返^六し^六得^六ぬ^六運^六の^六味^六
 今^七井^七根^七弁^七の^七輩^七也^七

古今^五の^五名^五將^五兼^五佐^五が^五
 大^三手^三揃^三自^三一^三時^三小^三
 早^四女^四都^四も^四し^四た^四り^四ね^四
 落^三ち^三行^三く^三心^三が^三母^三悔^三なる^三
 駒^四の^四足^四捲^四も^四常^四り^四
 多^六分^六妹^六り^六巴^六水^六
 かね^四は^四一^四手^四の^四大^四將^四戎^四

水^四も^四淺^四く^四飯^四系^四配^四
 右^四往^四左^四往^四も^四散^四れ^四青^四
 至^三從^三僅^三か^三り^三行^三な^三れ^三
 か^四ら^四新^四も^四只^四一^四騎^四
 馳^七付^七は^七る^七は^七兼^七平^七が^七
 君^五の^五寵^五愛^五淺^五から^五ず^五
 今^四は^四た^四ま^四なる^四富^四貴^四婦^四春^四

七 一のりの地を候く花や
 五 千軍万馬戎物ぞしそ
 四 丈の黒髪ふり乱し
 三 雪成欺く顔は
 二 日次の糖餅羅まて
 一 巴は御前を畏み
 三 涙と共る谷み込み

七 修羅の街列渡りゆく
 六 少根織す襪は
 五 血汐を染めし羅刀の
 四 弓つら様の物凄く
 三 千草母星の感慨成
 二 如何も戎器母を

三 涙を給ふ愛ひける
 六 御跡逐ふを漢様
 四 内田の三郎家義
 三 義仲是を以て
 五 音の関を美男を
 四 武運の末をいひ乍ら
 三 婦人の手打たれは

七 君の御前途氣遣は
 五 多くの敵を殺しぬ
 四 首は御前より出で
 三 扱は三郎家義は
 二 一期の花の甲首
 一 木意なき次次

東洋抄

八九

いづれ痛しき有様や

引矢と身ハの星取ハは

比翼連理ハの語ハ合ハも

可ハめは惜ハむ春ハの夜ハの

義仲程ハの大將ハが

引ハき連ハれハらハるハを

余ハ落ハりハてハ一ハ言ハは

母ハが迅速ハ夢ハの再ハに

下ハりハてハ身ハをハ知ハれハるハを

鴛鴦ハ比ハ目ハのハ贈ハ言ハも

思ハ東ハのハ間ハのハ夢ハなハれハや

死ハ出ハのハ旅ハ路ハもハ愛ハ妻ハ成

末ハ代ハまでハのハ恥ハ辱ハなり

此ハ邊ハはハいハまハるハ重ハけれハど

三 過ハ去ハみハ小ハ徒ハいハり

禮ハのハ袖ハもハふハりハかハる

切ハらハ切ハらハれハるハ修ハ羅ハ場ハの

三 相ハ見ハてハもハにハ詞ハなハ水

三 勝ハぬハらハうハばハかハらハなり

夏 糸ハのハ糸ハのハたハえハかハねハを

雨ハやハづハまハるハ血ハのハ涙ハ

夜ハ又ハもハりハ手ハもハも

場ハ断ハつハ計ハわハなり

辨の内侍

一 吾は折菰の多しは
 二 何れ頼み吉野山
 三 河のぬたの風成りみ
 四 誰が身もそか積るる
 五 去る程は辨の内侍は
 六 比側近く仕へり
 七 乱がよし折から
 八 花より外も知る人も
 九 一目千本の花の雲
 十 先帝後醍醐天皇の
 十一 黒木の所も在せり

一 君雲隠れの空の後は
 二 雨の淋も居給へり
 三 即ち媛君も使者来り
 四 今もも身逢ひ
 五 袖も知らぬ道芝の
 六 以文もも賜ひかば
 七 来りし者も誘はれ
 八 伏家の軒も行く春の
 九 折ふしは位行民の室
 十 我れ高安の郷もわ
 十一 思ふもさう成先も
 十二 露の起ふも関も
 十三 内侍は姫もも
 十四 侍三人侍女二人

辨の内侍

六 名具とてありしをたす
 五 句雲かぐるみり野の
 四 河内を流る青葉山
 三 夢さへ凄き木下岡
 二 馬路認むる由もな
 一 熊経最も出なる
 現れ出たる野の蘊諸

六 時は卯月の末つ方
 五 色も変る大和の
 四 帰るに如かき鳥の
 三 喬樹は雲霞散る
 二 漢毛露成結んで
 一 さも忍びし道辺
 有母も言はず後

六 侍三人成場を斬りす
 五 内侍一人成手解りす
 四 此時遅く彼の馬早く
 三 二三の家来従つて
 二 年は二十と二三なる
 一 萌黄袴の直衣紋かた
 烏帽子頂く有様

六 侍女成谷間を突る
 五 遥か鳥鳴成りつけ
 四 馳せ来り成津の
 三 七具足着るその上
 二 黄金作りの太刀成佩
 一 河つげれ成りを糧かす

井の侍

五

是^四より南朝の柱石を
楠河内の判官が子
事の情は知らぬとも
使者が糾せぬ怨敵なる
辨の内侍が垣間見
遂に略奪を企てて
言語を断つ振舞ひ

二代の忠臣一巻の英雄
同苗帯力正行なれ
先づ面漢が横ち振え
高の武藏守師直が
日來の野心違ふ漸く
斯の運と言いけるは
是れものふも自らげせの

其れと同時に内侍の反
水も濁りて落しけり
親しく目まかれるは
身は大将楠波
若も救はせ給はずば
およばぬ府の受人よ
備は身身の情なり

その内侍

十個の餘る敵の首級は
内侍は餘ら正行の備ひ
今日改初の手帳から
正行朝臣と見え参らば
妻は敵將の妻のため
危き難を遁れしは
死も羞むる上福の

三 袖も寒けさ山から
 一 念 禱求の友と
 一 期 送る絵
 三 何はれ優なまのめいれ

馬の音歎の勢さ
 松風蘿月
 五 何はれ優なまのめいれ

ミドリ琵琶新聞

△毎月一回 十五日 発行
 △購読料 一ケ年間金六拾五錢 (郵税共)

■ミドリ琵琶新聞 は琵琶同好者の座右を離すべからざる新聞にして毎月新曲琵琶歌及び文學者の琵琶歌註解等を掲載し、有益なる記事全紙に充滿せり

■ミドリ琵琶新聞 を読めば琵琶界の情況は居ながら手に取る如くよく解かる

■ミドリ琵琶新聞 を読めば琵琶道の新智識を得られる

■投書歓迎——記事の如何なるを問はず投書を歓迎す
且つ琵琶樂に關し如何なる質問たりとも回答す

■購讀料は郵便小爲替にて送金あれば直ちに新聞を郵
送いたします

大阪市南區難波新地五番町二四

ミドリ琵琶新聞社

(電話土佐堀二〇三〇)

大阪市南區難波新地五番町二四
筑前琵琶綠水會長

水也田流宗家 水也田綠水

◎習得者の心得

- 一、琵琶は歌ふものにあらずして談^{カマ}るものであるから一言一句文章の意
味をよく理解して歌中の人と成り彈奏すべし。
- 一、筑前琵琶の特長たる流しの内、春節は艶音にして優長なる事恰も春
日花に對するが如く、夏節は強音にして森嚴なること初夏新綠發生の
感ある如し、秋節は清音にして洒落假令ば霽夜明月を眺むるが如く、
冬節は愁音にして乾燥恰かも木枯の梢頭を吹くが如し、又山越節は舊
來の筑紫節にして最と婀娜たる調子なり、旭節は右と正反對の調子に
して詩吟の趣あり、春節は七の音調にて起り、夏節は六、秋は五、冬
は四より起ると心得べし。
- 一、初學者は琵琶の合の手(彈法)と歌と連絡調和せぬものだが此合の
手は歌詞の喜怒哀樂を一層完全に表はすものであるから歌の研究と共に
彈法の研究を怠つてはならぬ、例せば悲哀の合の手五號、十一號等

の手も弾き法が悪ると少しも悲哀には聞へない、折角一生懸命に歌つて悲哀を表して居ても合手の弾き法が悪ると爲めに歌を殺してしまふから弾法をおろそかにしてはいかぬ、悲哀の手は悲哀に勇壯の手は勇壯に弾かれればいいかない、即ち弾法の功拙は歌の生死に關するものである。

一、琵琶の習得法—初學者は初めから難づかしい歌曲を習ひたがるものだが小學校生徒が大學校の學科を習つて解る筈が無いのと同じ事で段々と初傳、中傳、奥傳、皆傳と階段を踏んで行かればいけない、又一つの歌曲を一日でも早く揚げて數ばかり進みたがる人があるが大變にいかぬ事で一曲がよく腹へ入つてしまへば次に習得すべき歌曲は容易に解る事が出来る、然るにどの曲もく荒覚えにして置くと前の前から忘れまふからよく注意すべき事で有る。

一、聲の練習法—聲は必ず腹から出さぬと聽者に感動を與へない、聲の悪るい人でも毎日練習さへ怠らなかつたら自然に出る様になるもので

ある、又どれ程調子の高いよい聲の出る人でも調子の底い先生に習つて居ると知らずく調子が底くなるものであるから自宅で稽古する時毎日一回だけ演奏會に演奏するつもりで自分の調子より半本又は一本ぐらゐ高い調子で一時間ぐらゐ練習するのがよい、然らば知らず知らずの内に聲量が増して来る。

左に音聲研究に際して注意すべき條項を示して置く。

- 一、酒、酢、わさびの如き刺激物を飲食せざる事。
- 一、夜更かし及び朝寝をせざる事。
- 一、演奏せんとする前多量に喫煙すべからず（禁煙に越す事無し）
- 一、茄子の類を食さぬ事。
- 一、演奏せんとする五時間程前に肉食する事。
- 一、演奏せんとする三十分程前玉子を食する事。
- 一、演奏前には端座してなるべく身體を安靜にしてあまり歩行等せぬ事。

一、姿 勢—何より目立つて見えるのは演奏者の姿勢である、端然と姿勢を正して居ると聴者の方でも勢ひ眞面目に成つて聞く氣になるが演奏中に首を振つて見たり歌曲が佳境に入りつゝある場合に不眞面目な姿勢でギロリ／＼と聴者の顔を睨廻したりすると折角身を入れて聞かうと努めて居ても悪感情が起つてつひ悪騒ぎの一つもする様になるから注意せねばならない。

一、歌詞の間違—琵琶の演奏者には歌詞の間違つた處を平氣でやつて居る人が有るが心ある人が聞いたらよい物笑ひになるから充分に文章は注意して間違ひの無い様にせねばなりません、本書に關し曲節の不審等有し時は切手封入の上御聞き合せに成れば直ちに回答致します。

綠水會長

水也田旭嶺識

大正六年六月五日印
全 年 全 月 十三日 發行

定價金參拾錢

作曲 水也田綠水

發行兼 印刷者 前田梅吉

大阪市東區南渡邊町八番地

大阪市東區南渡邊町八番地

發行所 前田文進堂

電話東四九九八
振替及一二四七三

禁轉載

賣捌所 全國各書店

既刊春の巻目次

君う代 敦盛_{段上}
敦盛_{段下} 城山
小督局 備後三郎
錦の御旗_{段上} 錦の御旗_{段下}
赤垣源藏 月照
常陸丸 備後三郎
平野次郎 白虎隊
廣瀬中佐 蕾の花
曾我 本村長門守
勾當内侍 以上

既刊夏の巻目次

春日野 臺灣入
河内の宿 松の廊下
扇の的 石童丸
太田道灌 四條暎
竹林唯七 叢雲
宇治川_{段上} 宇治川_{段下}
湊川 梅若丸
海洋島 静御前
以上

既刊秋の巻

川中島
湖水渡 鶴
夜の吹雪
伏見の吹雪
佐渡の若竹
佛御前
泉の三郎
小楠公
勅進帳
義民魚鱈
隅田川
吉野静
以上

既刊冬の巻

大高源吾
櫻井の驛
桶中佐
伊賀の晴
菅公
護良親王
義士の本懐
靈馬の連
菊水
高田馬場
南部坂
以上

春のト既刊

稲村ヶ崎
沖頼
朝比奈三郎
弓矢の譽
小督の局
磯ヶ嶽
蔭辨慶
橋辨慶
高千穂
旅順の魁
七州南
金州南
梅若丸
大江山
以上

夏のト既刊

益我樹
装束前上
静山前下
玉藻の前
日本橋
名残の花
義平
芳洗岡
吉野山上
吉野山下
東津原
辨の内侍
以上

秋のト既刊

櫻田の泡雪
吉野静下
山崎合戦
濡衣
名和長年
乃木將軍
小松原
山科の別
高山考九郎
千平の前
小油曾我
以上

冬のト既刊

佳島
別の五
船政山
美乳の團
本能寺
千早城
實盛
項羽
菊の礎
蒙古の寇浪
以上

新曲の上既刊

茶臼山
村上喜剣
煙の浦
田村郎
明大高源吾
寺坂吉右衛門
佐久間少将
龍の口
菊地武光
和氣清麿
新嵐合戦
以上

端歌の巻 既刊

君が代松上鶴
日本刀四季の遊
貝は磯辺炭千鳥
水は石小督
金剛石沖の石
立田の楓菅の公
梅が香栗合戦
春の夜七郎落
近江八景夢の跡
月は八景夢の跡
松の緑琵琶歌
社頭の杉櫻の狩
義士母の
國松夢の滅
以上

筑前前彈法譜上

訂正本

各參拾五錢下

終

終